

神戸大学と

Across the Boundaries

No.9

神戸大学のメタモルフォーゼを伝えるメディア

わたし

「大学と社会の結び目」自己実現への道はひとつではない
Jリーガーから弁護士に転進した
八十祐治さんに聞く
「ききん・だより」募金状況・事業展開報告、ほか

どの道を目指しても、
努力すれば必ず成果はついてくる。



【神戸大学基金を大きく育てよう】

●クラブ活動くいま・むかし>

創部51周年を迎えた「神戸大学ユースホステルクラブ」

伊藤忠テクノソリューションズ株式会社

相談役 奥田陽一さん

●基金の実施例紹介

通算14回目を迎えた「東北ボランティアバス」への支援



プロフィール
八十祐治 (やそ・ゆうじ)

1969年生。大阪府出身。大阪府立茨木高校、神戸大学経営学部を経て、1993年、Jリーグ発足と同時にガンバ大阪に入団。MFとして、2年間3試合に出場した。その後はウィッセル神戸、アルビレオ新潟(現アルビレック新潟)、横河電機(JFL)を経て2000年12月に現役を引退。引退後は弁護士を目指し、2005年、4度目の挑戦となる司法試験に合格した。大阪弁護士会に所属し、大阪市北区の摂津総合法律事務所に勤務する。

どの道を目指しても、努力すれば必ず成果はついてくる。

子供のころからサッカーボールを追いかけて、ついにプロサッカー選手への夢を実現した八十祐治さん。それだけでも「ひとつの人生」と言ってもいいところ、八十さんはいま弁護士になって「第二の人生」を歩んでいる。八十さんは神戸大学経営学部の出身。自己実現への道がひとつではないことを身をもって証明した。

●夢を追いかけたサッカー少年時代

八十さんがサッカーと出会ったのは、幼稚園の年長組のとき。5つ歳上の兄がサッカーチームに入ったのをきっかけに、サッカーボールを蹴って遊ぶようになった。

「それまでのどんな遊びより、ボールを蹴って遊ぶのが一番楽しくなりました」

八十さんは、自分もチームに入ってサッカーがしたかったのだが、まだ小さすぎた。

「本格的に始めることができたのは、小学校4年生から」

小学校の部活として4〜6年生を対象にしたサッカーチームがあつて、4年生になつてようやく入れたのである。それからは、小、中、高校とも、学校の部活でサッカーに関わってきた。

八十さんが小学校6年生のとき、中学校の先輩たちが、大阪の大会で優勝し全国大会への出場を果たした。

「その大阪大会の決勝戦を応援に行ったとき、赤いユニフォームで活躍する先輩たちの姿にすごく感動しました」

それまでは勝っても負けてもサッカーができるだけで楽しかったのが、カッコいい先輩たちが優勝するのを見て、自分たちも中学校

にあがつたら全国大会に出たいと、憧れは確固とした目標に形を変えていたのだ。小学校時代のチームは、高槻市の小さな大会でも優勝することがなかった。

「その弱小チームが、猛練習のおかげで中学3年生のときにはじめて、大阪府大会の予選である北摂地域の大会で優勝しました」

試合が終わった瞬間、中学3年間苦勞してきた仲間といっしょにうれし泣きをした。

「そのときの体験は強烈な印象として残っていますね。皆、小学校からいっしょにやってきました仲間でした。嬉しくて涙がこみ上げてくるという何ともいえない感覚は、今でもはっきり覚えています」

その後大阪府大会で優勝し、近畿大会でも優勝。数あるチームの頂点に立ち、全国大会への出場を果たしたのである。

●1部リーグで活躍する神戸大学へ

八十さんは、中学校のチームでキャプテンを務めた。その活躍を見ていた高校のサッカー強豪校からは当然にも誘いが来た。しかし、八十さんは地元に進学校である茨木高校を選んだ。

「サッカーだけではなく、勉強でも負けたく



●勤める弁護士事務所は中之島近くにある

ないという気持ちでがんばっていたので、うまく行き出すとそれが励みになって、勉強ももつとがんばろうという気持ちにつながっていききました」

サッカーも勉強もという姿勢がすでに出来上がっていたのである。

「茨木高校は進学校なのでチームの半分くらいは初心者でしたが、高3のとき大阪府のインターハイ予選でベスト8まで進むことができました。大昔にインターハイに出たことがあつたらしいのですが、それ以来の快挙と言われました」

キャプテンを務めていた八十さんは、ベスト8進出が認められて団体の大阪府代表選手に選ばれた。その結果、サッカーの強い私立大学から誘いの声がかかった。

しかし、ここでも八十さんは独自のモノサシで大学を選んだ。当時、神戸大学のサッカー部は国公立大学で唯一、関西学生サッカーリーグの1部に所属していた。

「神戸大学は国立です。サッカー推薦もありませんが、そうした環境で集まってきた人たちが切磋琢磨しているという話を聞いて、かっこいいと思ったのです」

この話は、実は、茨木高校から神戸大学の

経営学部に進学していたひとつ上の兄から聞いたのだという。

「そこで僕も神戸大に進学して強豪チームに立ち向かって勝ちたいという気持ちが湧いてきました、それで受験することになりました」

八十さんはその後、一浪して神戸大学に入学した。しかし、そのとき、サッカー部は2部に降格していた。

「ようやく2年生のときに2部で優勝できて、3年生、4年生は1部でプレーすることができました」

八十さんの活躍は目覚しかった。

「関西学生選抜というのがありますが、それに2年生の終わり頃に選んでもらえました」

その結果、地域選抜対抗の全国大会に出場できたことが、八十さんのサッカー人生の中で一番大きな転機になったという。全国大会には、秋田、相馬、名波、藤田、沢登など、後のフランスワールドカップの主力メンバーがいて、そうした有力選手と実際に試合をすることで新たな刺激を得たというのだ。

「テレビや雑誌で見ていた人たちと同じ真剣勝負の場所に立てた。やってみると当然、向こうのほうがうまいのですが、それまで実感はなかったのが、トップレベルまで行きたい、トップレベルの人たちともつとやってみたいと思うようになりました」

●ガンバ大阪の選手として試合に出場

ちょうどその頃、「2年後にJリーグ開幕」のニュースが駆け巡っていた。少年のころから「憧れ」や「夢」にすぎなかった「プロサッカー選手」への道が俄然現実変わったのである。「いよいよプロになりたいという気持ちが強くなってきました」

そうして、1993年の卒業と同時に「ガンバ大阪」に入団。Jリーグ開幕とともにプロサッカー選手としての道を歩き始めた。

「ラッキーでもあったのですが、同じポジション（ミッドフィールダー）のレギュラーの方が怪我をされて、それで試合に出るチャンスが巡ってきました」

その結果、1993年には3試合に出場することができた。対戦相手は、鹿島アントラーズ、今はなき横浜フリューゲルス、そしてヴェルディ川崎である。戦績は、フリューゲルス戦のみ勝利。

この3試合がすべてだが、中でも忘れられない思い出は、ヴェルディ戦が地上波で放映され、ガン闘病中の父親にプレーする姿をテレビを通じて見せることができたこと。

「父は翌日なくなりました。厳格な人で、僕のプロ入りにも反対していたのですが、これが唯一僕にできた親孝行かもしれません」

●挫折と転進

ここまではプロサッカー選手としてうまくいっていた。しかし、怪我をしていたレギュラー選手が復帰すると、少し2軍で調整してこいということになった。

「2軍に落ちてから、すぐに1軍に戻りたいという気持ちが強くて焦り出しました」

そして、焦りがミスをまねき、ミスの悪循環から抜け出せない精神状態に陥ってしまった。

「今まで楽しかったサッカーが苦しいものに変わってしまったのです」

それまでのサッカーは、目標に向かって努力すれば着実に成果ができてきた。その過程で「充実感」という楽しさを味わうことができたのだが、いまはその正反対の状態だった。

その後、2つのプロチームを経て1998年に実業団の横河電機に移籍。3年間プレーして2000年12月に現役を引退した。八十さんは、プロの経験を振り返って言う。

「プロに行って一番思ったのは、個人個人がすごく気も強いし、チームの和というより、個人の主張が強いこと。そういうところが自分の甘さだったのかもしれないけれど、それまでの大学とか高校では、うまい奴もへたな奴もいて、チームとして補いながら皆で高みを目指そうという感じだったのが、プロの世界ではうまい奴だけが必要とされる。いい意味での個人主義が強いですね」

●弁護士を目指す

それからの八十さんは気持ちを切り替えて、次の目標を「弁護士」に設定した。

「まだ31歳だし、もう一度違うことにチャレンジしたらいいのではないかと。サッカーに注いでいた情熱と時間を何か違うことに向けられるのではないかと考えたのです」

2001年の5月、2年コースの司法試験予備校に入学。翌年5月に最初の司法試験を受けたが不合格。2003年の5月に二度目を受け、それも雨があらず、もつと勉強する時間がほしいということで、2003年8月末で退社して大阪に戻ってきた。

「それから毎日12時間、勉強机にしがみつく生活が続ききました」

翌2004年5月の司法試験では択一テストに合格。しかし、8月の論文テストで落ちた。そして、次の2005年に択一、論文、口述（面接）のテストをすべてクリアし、晴れて司法試験に合格した。2005年の11月だった。「こう振り返るとかなり短期間のような気が

がしますが、実際の4年間は自分には地獄のような感じでした（笑）」

「努力すれば必ず成果がついてくる」という信念であった。

いま弁護士になって5年。八十さんは、弁護士としての将来のビジョンを次のように語る。

「せっかく弁護士になったのだから、子どもの権利について、より良くなるように少しでも関わってほしいという気持ちがあります」

例えば虐待の問題やいじめだとか、少年事件とか、そういうところに深く弁護士が関わ

れるのだと分かり、少しでも役に立ちたいのだと言う。さらに、スポーツをやっている人の権利を守る活動にも関心がある。

「私もスポーツを一生懸命やってきた人間なので、スポーツをやっている人たちの権利に関わっていったらいいなと思います」

八十さんの「第二の人生」はまだ始まったばかりだ。



●ガンバ時代の八十さんの雄姿（左）

今こそ原点に返って、青少年の野外活動を支えよう。

「神戸大学ユースホステルクラブ」は1962年に創部されました。その4年後に入學して入部した奥田さんは、当時のクラブ活動が青少年の育成という社会貢献の実践の場として始まったことを強調します。3回生の時には部長を務め、総勢110名もの部員の先頭に立って活動を展開しました。



●奥田さんが部長のころの機関紙「心友」

●青少年の野外活動を支えるユースホステル

ユースホステル運動は、20世紀の初め、ドイツの小学校教師リヒャルト・シルマンによって生み出された。山のない東プロイセン地方で育ったシルマンは、師範学校の修学旅行で初めて山に登り、自然と触れ合い、自然の中で学ぶことのすばらしさを経験した。シルマンは、家庭教師となり小学校教師となっても、子供たちを遠足に連れて行って勉強する「移動学校」を盛んに実践した。あるときシルマンは、「移動学校」の最中に豪雨に合い、子供たちの宿泊場所に困ってしまった。しかし、運よく夏休み中の小学校の教室を緊急避難的に貸してもらうことができた。そのときシルマンは、休み中の小学校を青少年の旅行のための宿泊施設として利用するの思いつき、「ユースホステル運動」として提唱した。このアイデアは、その後、強力な支持を得て世界中に広まり、今日に至っている。

●恵まれた自然環境の中で社会貢献

神戸大学の周辺には、六甲山や仁川にあるキャンプ場など豊かな自然があり、野外活動にはうってつけの環境だった。「この自然の中で小中高生たちと遊びながら彼らの成長に貢献することができれば面白いじゃないか」

それがユースホステルクラブの活動目標となった。六甲山に親しんでもらうために「六甲山ハイキングガイド」を作成したりもした。さらに兵庫県にはユースホステルがたくさんあり、各地に出かけて行つては山歩きやキャンプを楽しんだ。中でも忘れがたい思い出は、クラブの全員110名で行ったキャンプ。

「正確な場所は忘れてしまいましたが、山の斜面に見渡す限り20張ほどのテントを張ってキャンプをしました」

夜にはみんなでキャンプファイアもやった。それはもう圧倒的な迫力だった。

「今ならいろいろ制約条件が多くて、到底できないでしょうが、貴重な経験でした」

●「山ブーム」に乗って原点復帰を

奥田さんが部長になったのは1968年。この頃は、学生たちが非常に政治的になって学生運動が活発化した時代でもあった。

「学生たちは何らかの形で社会に貢献することを模索していたんだと思います。わたしたちも、ユースホステル運動を通じて青少年の育成に貢献したいと思っていました」

あれからまもなく半世紀。現在のユースホステルクラブは、部員数も減少し、また低コストの宿泊施設としてユースホステル以外の選択肢が増えていく中で、クラブ活動の方向性を見失いかけています。

一方世の中では現在「山ブーム」が起きている。「山ガール」に始まった今回の「山ブーム」はかつてのブームを凌ぐ勢いだとも言われている。

現役世代から50周年記念に先輩から10人用大型テント



現役部長 田中萌子さん（農学部3回生）

当クラブは昨年2012年、創立50周年を迎え、先輩たちから10人用の大型テントを記念品として寄贈していただきました。記念パーティには約600名の先輩方がお集まりになり圧倒されました。

現在の部員は新入生を除いて約10名。あまり活発とは言えない状況です。そもそも昔とは環境が変化し、ユースホステルは現在外国人バックパッカー向けの宿という印象が強くなっています。

しかし、当クラブとしてユースホステルに泊まること、青少年を含むオープンキャンパスは欠かさず実行するようにしています。それをやめたら単なる旅行クラブにならなからず。

「中高年だけでなく若者たちも山に登っているそうです。ユースホステルクラブとしてもこのブームに乗らない手はないんじゃないでしょうか」

ユースホステルクラブの原点は、野外活動を通じて社会に貢献すること。青少年の育成や自然に対する理解の促進を今回の「山ブーム」に乗って推進してみてもどうかという提案だ。

かつてシルマンが「山」を通じて自然を再発見したように、自然の中で澁刺とした思考を取り戻すことで、より良い社会の実現を目指すことができるのではないだろうか。

さらに奥田さんは、付け加えた。「神戸大学基金がこうした活動を後押ししてくれるなら、これほど心強いことはない」



伊藤忠テクノソリューションズ株式会社 相談役 奥田陽一さん

1966年経営学部入学。1970年卒業、伊藤忠商事入社。ニューヨーク大学大学院でMBA取得。同社副社長、伊藤忠テクノソリューションズ株式会社社長、会長を経て現在同社相談役。

14回目を迎えた

「東北ボランティアバス」活動への支援

東日本大震災の復興支援のための「東北ボランティアバス」活動は、この4月末から5月初めにかけて派遣で通算14回目を迎えました。神戸大学基金は、この活動を当初から支援してきました。ここでは、これまでの活動の概要をご紹介します。

●「東北ボランティアバス」とは？

「東北ボランティアバス」はいつから始まったのですか？

A 震災が発生した年（2011年）の4月30日に第1回目を派遣したのが最初です。1回目から5回目までは、内陸部の遠野市に設置された「遠野まごころネット」

●質問に答えてくれた人：

学生ボランティア支援室・コーディネーター

林 大造さん

東北ボランティアバス 学生代表

梅本 匠さん（国際文化学部3年生）

東北ボランティアバス 学生副代表

北澤彰大さん（国際文化学部3年生）



●北澤さん(左)、林さん(中)、梅本さん

のボランティアセンターを拠点にして被害の大きかった沿岸部に支援に行くという形をとりました。

Q どんな活動を展開したのですか？

A 瓦礫撤去や泥のかき出し、足湯ボランティア、阪神・淡路大震災以来作りつけられているソウのぬいぐるみ「まけないうさぎ」を作る手芸活動などを実施しました。その後、沿岸部に宿泊が可能になってからは、翌年の2月に派遣した第6回目に陸前高田市の和野会館に宿泊。8回目には金石市の集会所にも宿泊して活動しました。

Q どれくらいの参加者数になりましたか？

A この4月26日に派遣した14回目に参加者はのべ555人になります。毎回、参加者の半分程度がリピーターです。経験者と新しい参加者の組み合わせによって経験が伝えられ、活動が深まります。

Q 基金からの支援の使いみちは？

A 学生1人につき1週間の派遣で、食費と宿泊費を合わせて1万円〜15万円、活動費として5千円ほどかかります。これらは学生の自前ですが、バス代については基金をはじめとする支援でまかっています。



●出発前の第14回東北ボランティアバス

●地域とのコミュニケーション

Q ボランティアバス活動を通じて被災地との関係はどのように深まってきたのでしょうか？

A 例えば最初から活動してきた陸前高田市の上野地区の町内会・自主防災会とは、神戸大学キャリアセンターがそれぞれ地域連携協定を結びました。息の長い復興支援を目指そうというわけです。

Q ほかの地域ではどうですか？

A 8回目から公民館に宿泊させてもらっている金石市の鶴住居（うのすまい）地区では、夜の暗闇を少しでも減らしたいという地域ニーズに応えようと、学生たちの発案で街灯の設置運動が始まりました。

Q どんな街灯ですか？

A 昼間に太陽電池で発電・蓄電し、夜間にLEDを点灯する方式です。これを購入・設置するために募金活動を始めたのです。神戸市の企業の協力で安く購入することができて、これまでにすでに5基を設置しました。



●学生たちの募金活動で寄贈したLED街灯

●「忘れない」活動を

Q ボランティアバス活動の今後は？

A 被災地支援の根底には、「震災を忘れない」という阪神・淡路大震災の教訓が生きています。東北ボランティアバスの学生代表は、派遣の1ヶ月ほど前から活動計画や資金計画の立案などで超多忙な日々を送っています。しかし、被災地の人たちが「また来てくれたね」と喜んでくれると苦労も報われます。ある種の「サークル活動」のように、あくまでも学生の自主性のもとに持続的に活動していきたいと思っています。

Q 長期にホームステイする学生もいるとか？

A ボランティアバスへの参加をきっかけに、長期支援の必要性を感じた学生が、被災地にホームステイしてインターンのかたちでボランティア活動を行っています。

Q 学校はどうなるの？

A 神戸大学では、こうした活動をバックアップするために公欠制度を創りました。復興支援の活動が長期的かつ持続的に発展していくことを目指しています。

きぎん・だより

「基金の募金状況」

「神戸大学基金」の
取組みのご報告と
さらなるご支援のお願い

「神戸大学基金」の平成25年3月31日現在の募金状況はグラフのとおりです。

本学は、平成24年5月15日に創立110周年を迎え、より多くの皆様方から「神戸大学基金」にご厚意が寄せられました。ここに心より感謝を申し上げますとともに、今後も世界的な存在感のある競争力のある大学となるために、構成員一人ひとりが「真摯・自由・協同」の精神を共有しつつ、更なる飛躍をして参りますので、今後とも皆様からのご理解とご支援をお願い申し上げます。

「基金の事業展開内容」

国際化への対応をはじめ、
多彩な活動を支援

神戸大学基金（基盤事業）の展開内容は、以下のとおりです。

- ① 明確な目標を持った優秀な学生の海外留学・研修への派遣支援として
海外派遣・語学研修・留学・海外インターシップ・ボランティア・国際学会等派遣事業
- ② 海外に向けた発信への支援として
研究者向け英語個人指導・学部生向け英語プレゼンテーション指導等
- ③ 海外からの優秀な留学生・研究者の受入と

して

ダブルディグリープログラム等に参加する協定大学から来学してくる海外留学生への支援

④ 神戸大学基金奨学金制度の充実

・神戸大学基金緊急奨学金（災害や不慮の出来事による修学・生活困窮学生への支援）
・神戸大学基金奨学金（優秀かつ生活が困難している新1年次生への支援）

⑤ 課外活動（ボランティア活動を含む）支援

・東北ボランティアバスへの支援
・顕著な活動実績をあげた課外活動団体・個人への支援



●活気溢れる東北ボランティアバスの車内

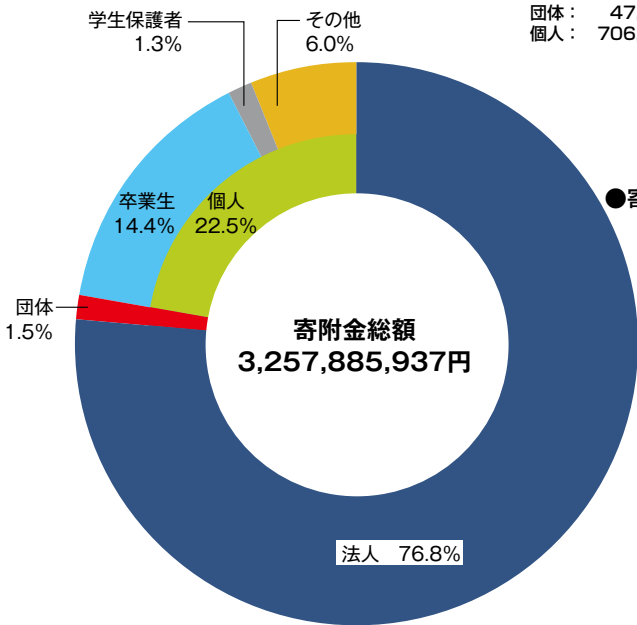
⑥ 東京地区におけるプレゼンス向上活動支援

・首都圏における同窓生とのネットワークの

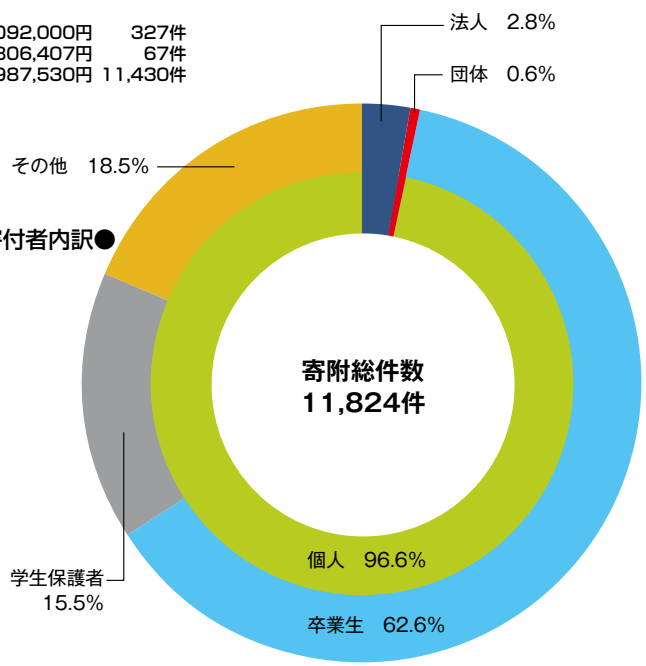
●図で見る神戸大学基金募金状況
(2013(H25)3.31 現在)

寄附金総額：3,257,885,937円
寄附総件数：11,824件

【内訳】
法人：2,503,092,000円 327件
団体：47,806,407円 67件
個人：706,987,530円 11,430件



●寄付者内訳●



■法人：2,503,092,000円
■団体：47,806,407円
■個人：706,987,530円
(個人内訳)
■卒業生：469,178,660円
■学生保護者：43,855,000円
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：193,953,870円

■法人：327件
■団体：67件
■個人：11,430件
(個人内訳)
■卒業生：7,405件
■学生保護者：1,837件
■その他(学内教職員/名誉教授/卒業生保護者等)：2,188件

- ・構築・強化
- ・首都圏における情報発信業務・イベント等への支援業務
- ・在学生の首都圏における活動支援



●就職相談もできる東京オフィス

ご寄附いただく方法

【個人のみならず】

神戸大学へのご寄附に対しましては、寄附金額から2千円を除いた額について所得控除を受けることができます。また、平成23年1月1日以降のご寄附より、本学に寄附した翌年1月1日に神戸市にお住まいの方は、神戸市個人市民税の税額控除を受けられます。

ご寄附の申込方法は、本学指定の払込取扱票でのご寄附のほか、インターネットからご寄附いただくことが可能です。

本学指定の払込取扱票がお手元にない方は、お名前・住所・電話番号を下記の基金推進室までお知らせください。折り返し払込取扱

投票一式をお送りします。

インターネットからのご寄附は、神戸大学ホームページからクレジットカード決済、インターネットバンキング、銀行振込のいずれかをお選びいただくことが可能です。詳しくは、左記のホームページでご確認ください。なお、クレジットカード決済をご利用いただけるカードは、「JCB」「VISA」「MasterCard」「JAMEX」「Diners Club」です。



http://
www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/kifu-personal.html

【法人のみならず】

所定の寄附申込書に必要な事項をご記入の上、下記基金推進室まで郵送ください。折り返し、振込依頼書をお送りします。寄附申込書は、基金推進室に法人名・住所・電話番号をお知らせいただければ送付します。あるいは左記のサイトから書式をダウンロードすることもできます。



http://
www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/kifu-enterprise.html

【神戸大学基金ホームページ】

神戸大学基金について、詳しくは左記のホームページをご覧ください。



http://
www.kobe-u.ac.jp/info/kikin/top.html

お知らせ

皆さまの、貴重なご意見、ご感想など、一

言メッセージを神戸大学基金推進室にお寄せください。

【神戸大学基金推進室】



E-Mail:
Kikin@office.kobe-u.ac.jp

読者からの一言メッセージ

次のようなメッセージが基金推進室に寄せられました。

【私はこんな理由で寄附しました】

●自分がお世話になった大学に少しでも恩返しをしたい。また今度私が学生達を支援する番だと思っています。

●神戸大学が日本を代表する、ユニークな大学に飛躍してほしい。

●息子が大学に在籍している保護者として、小さな力が集まれば、大きな力となり、ほんの少しお役に立てば...と思っています。

●神戸大学を愛するが故に

●息子を一人前の社会人に育てて頂いたお礼です。

●学生の留学資金の一部として

●山中教授に続くノーベル賞受賞者を

発行のことば

神戸大学は、明治35年（1902年）の創立以来、開放的で国際性に富む固有の文化の下、「真摯・自由・協同」の精神を理念とし、社会に貢献する人間性豊かな指導的人材の育成と、普遍的価値を有する「知」の創造拠点としての世界的教育・研究機関たることを目指してきました。

● 今、20世紀都市文明からの転換が激しく迫られる中で、大学にはその創造力を発揮して新しい21世紀文明構築のさきがけとなることと求められています。「神戸大学ビジョン2015」は、その第一歩として、「世界トップクラスの教育・研究」「卓越した社会貢献・大学経営」の実現を目指しています。

● 「神戸大学基金」は、ビジョンの実現を加速するためのターボ装置です。ターボの力をより強力なものとするためには、神戸大学が社会により深く根を張り、そこからの支持と支援を拡大することが不可欠となっています。

● 本誌「神戸大学とわたし」Across the Boundariesは、神戸大学と社会の接点を取材し、「ビジョン」を先取りする取り組みを可視化すること、社会貢献の促進とビジョンの早期実現に資することを目的として発行されました。読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

2010年1月1日

※表紙題字下の「メタモルフオーゼ」は、生物学でいう「変態・変身」の意。本誌は神戸大学が21世紀に飛躍する様を追いかけてます。

神戸大学とわたし

Across the Boundaries
通巻第9号 No.9
2013年7月16日発行

発行人 国立大学法人神戸大学
編集人 企画部社会連携課
〒657-8501神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5414
FAX: 078-803-5024



E-Mail:
kikin@office.kobe-u.ac.jp

思い出の詰まった母校へ! **第8回** 2013年10月26日(土)
 記念式典: 出光佐三記念六甲台講堂
神戸大学ホームカミングデー

【予定しているイベント】

記念式典、第10回留学生ホームカミングデー、学部企画、ホームカミングデー市、学生主催のイベントなど

卒業生のみなさま・名誉教授の先生方に、現役学生・教職員との交流を深めていただく機会として、
 今年も「ホームカミングデー」を開催します。

ゼミ・クラブ・サークル同窓会の同時開催もお待ちしております。みなさまお誘い合わせの上、お越しください。



振り返れば六甲の山並 ~あの頃の友に会いたい



*Toward Global Excellence
 in Research and Education*